方丈（ほうじょう）の間で

チェコの首都プラハの旧市街地。教会の内部は光と色に満ちていた。仏教にも荘厳な光と色がある。

私の住んでいる地域では禅宗のお坊さんを尊称して「方丈さん」という。これは、前回のこの欄に登場した維摩居士（ゆいまこじ）の居室が方一丈であったことに由来している。

衆生病む故に我病むという維摩を見舞うようお釈迦様から要請を受けて文殊菩薩（もんじゅぼさつ）が維摩の居室に向かおうとすると、そのことを知った諸々の菩薩方（経には八千とある）や、大弟子天人百千人が、これはきっと素晴らしいことが聞かれるに違いないと、ぞろぞろと付いていく。一方維摩は神通力でこのことを知り、全員を受け入れるべく自分の一丈四方の居間を空っぽにして彼らを待つ。

「三人よれば文殊の智慧」というように、文殊菩薩は智慧の菩薩である。維摩は、衆生が病むから自分も病むというほどだから、これは慈悲の役を担って経に登場している。

「慈悲」、慈はいつくしむ、悲はかなしむ。かなしむは嘆き悲しむというより、寄り添っておもいを同じくするの意。恩師の橋本先生は「智慧なき慈悲は暗く、慈悲なき智慧は危ない」といわれた。これを自分流に、「智慧なき慈悲は迷走し、慈悲なき智慧は暴走する」と思っている。

寄り添いおもいを同じくするだけでは困難事の解決は見えてこない。しかし、ことの

本質をことごとく見抜いても、慈しみ悲しむことがなければ、その解決法は相手に届かない。それが、「智慧なき慈悲は暗く、慈悲なき智慧は危ない」

文殊菩薩が維摩に問いかける。「あなたの病はいつ終わるのですか」

維摩が答える「この世のすべての人々が病から解放される時、私の病は終わります」

維摩は在家のいわば一般人だが、ここでは慈悲の菩薩として文殊と対峙している。ここで維摩の言っていること、この世から病がなくなることは、およそあり得ないことのように思う。だから、菩薩はいつまでも永遠に人々のために病み続けるとも言えるし、その逆に、菩薩がついているのだから病は必ず治るのだ、安心すればいいとも言える。

すると、このような菩薩はどこにいてどうすれば知ることが出来るのかという問題が出てくる。問いが徐々に神秘的になり閉じた世界の課題のように変質してくる。

菩薩は確かにいると思うのは信である。

信は容易ではない。

それでは信に至までの処理方法は。

これはずるい方法かも知れないけれど、「菩薩がついているのだから、まあ安心だ」

と言うところで止めて結論だけいただいて、その先の問いは捨てるのでなく一旦停止にしておく。そして、いつまでも問い（菩薩はどこにいてどうすれば知ることが出来るのかと云々）が消えないようなら、いただい結論も捨てる。今のところ言えるのはこれだけである。

方丈の間では、いろいろおもしろい問答が続いていく。

例えば、この世はつらく苦しいが早く楽なところに行きたいとは願うなとか、過去を反省し振り返るのはいいけれどいつまでもそんなことにしがみついてはいけない、それは愚痴（ぐち）だとか。

ここまでの説明では維摩経の入り口に立ったくらいにすぎません。現代語訳も漢訳も容易に手にすることが出来るので、直接経典にあたってみて下さい。

（二〇〇七年五月二五日）